

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——

遠 藤 薫

1. はじめに

筆者の猫研究は、三つの起点を持っている。

一つは、京阪および江戸（東京）を中心とした近世の猫ブームである。

もう一つは、同時期に顕れた、農村地域の猫信仰である。

そして最後が、この両者をつなぐ文化・産業の伝播のダイナミズムである。

当然のことながら、これらは相互に関連している。

猫伝説が盛んに語られ、猫神や猫塚として祀られた時代、文化にせよ産業にせよ、物理的な空間を伝って、伝播していったであろう。すでに遠藤(2015, 2019)では、東京の猫聖地およびその他のいくつかの場所について、地形的類似性とその意味を指摘した。本稿では、このアプローチをさらに拡張し、猫聖地を地政学的に考察したいと考える。

2. 阿武隈川に沿って

災害による歴史の消失

都市部以外では、近年、人口減少が進み、猫にまつわる伝承や、猫を祀る寺社や塚なども、人びとの意識から忘れられていく。ことに大きな災害があると、古くなり、意味のわからなくなった史料や遺跡は、差し迫った復興作

業の中で意識されぬまま廃棄されてしまうことも多い。2011年の東日本大震災でも、旧家の蔵なども被災し、多くの歴史資料が傷つき、失われた。懸命の回復作業が続けられてはいるものの、戻らないものも多い。

2019年秋は、二つの大きな災害があった。

一つは、10月30日に起きた首里城焼失で、正殿が完全に焼け落ち、全収藏品1524点のうち約400点が消失し、残ったものも状態が劣化しているものが多いという。

もう一つは、10月12日に日本の広い部分に大きな爪痕を残した台風19号である。10月6日3時に発生した台風第19号は、非常に強い勢力を保ったまま、12日19時前に伊豆半島に上陸し、多くの被害を出した。台風の接近に伴い、西日本から東日本の太平洋側を中心に激しい雨が降らせた。12日午後から慎重にかけて、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県、静岡県、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、新潟県に、岩手県に大雨特別警報が発表され、広い範囲で雷を伴った猛烈な雨や非常に激しい雨が降った¹⁾。被害が大きかった県は、表1の通りである。

表1 2019年台風19号による人的・建物被害²⁾

都道府県名	人的被害			住家被害	
	死者	行方不明者	負傷者	全壊・半壊・一部損壊	浸水
宮城県	19	2	42	5542	14427
福島県	32		59	17955	3565
千葉県	12		30	2048	2796
神奈川県	9		43	816	1495
長野県	5		144	6942	1732

東日本大震災/台風19号と阿武隈川流域

表1からもわかるように、被害が大きかったのは、宮城から福島にいたる

- 1) 「令和元年台風第19号及び前線による大雨による被害及び消防機関等の対応状況(第62報)」令和元年12月5日(木)17時00分 消防庁災害対策本部による。(https://www.fdma.go.jp/disaster/info/items/taihuu19gou62.pdf)
- 2) 上記資料より、筆者が抜粋、編集。

阿武隈川沿いの一帯である。

この地域は、東日本大震災でも大きな揺れを経験した。仙台近くの名取市が津浪で甚大な被害を受けたことは誰にとっても鮮明な記憶であろう。名取市と同じく、太平洋岸の地域の被害は大きかった。これに比べて阿武隈川に沿った内陸部では、地震の揺れによる被害は、建物の損壊が主だった。反面、内陸部ではむしろ、地理的に近い、福島原発事故の影響が大きかったという。2019年3月に筆者がこの地域を訪れたとき、角田のタクシーの運転手さんはこんな風に語った。

「このあたりは、地震の被害はあまりなかったですよ。それでも旧家の建物や土蔵がひっくり返ったり、壊れたりしましたね。で、地震をきっかけに、古い建物を新しく建て直したり、土蔵を整理した家も多かったですよ。それを目当てに、京都の方から骨董屋がきたりもしてたみたいですよ。」「地震より福島原発事故の方が問題になりましたね。双葉町からそれほど遠くないということで、放射線量を量ったりね。風評被害なんかもありました。あれ以来、このあたりでもイノシシが増えてね。猟師も減ってるから、退治するのも難しいよ。猟師なんかだと、イノシシ鍋にもできるのだろうけれど、このあたりじゃ、放射能を浴びてるかもしれないということで、食肉としての利用も禁止なんだよ。何にも打つ手はないね。」

そして2019年10月、台風19号による豪雨は、阿武隈川水系で多くの堤防決壊を引き起こした。これにより、多くの地域、道路が土砂に埋もれ、交通網が分断され、孤立する地域も多く発生した。なかでも宮城県伊具郡丸森町は、町内を流れる阿武隈川水系の3河川の18箇所ですべて堤防が決壊し、死者10名、行方不明者1名を出した。先に述べたような歴史的史料、歴史的遺跡の消失も危惧されるのである。というのも、この地域は、現在こそ、人口減少と高齢化によって未来に向かっての不安が語られているが、先のタクシーの運転手さんの言葉からも垣間見られるように、古い大きな屋敷もそこに残っている。かつては、栄華を誇った地域でもあるのである。

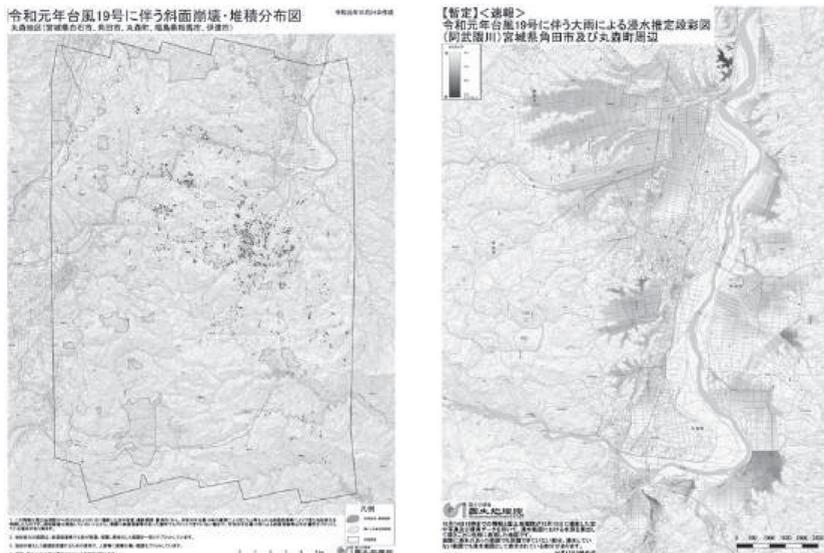


図1 国土地理院による令和元年台風19号に関する情報(丸森町付近)³⁾

またこの一帯は、猫にまつわる寺社や猫塚が全国的にも非常に多いことでも知られている。本稿では先ず、この阿武隈川流域から、猫聖地の地政学的考察を始めたい。

3. 猫聖地と養蚕業

猫聖地としての丸森町

先にも述べたように、阿武隈川流域には、多くの猫碑、猫塚、猫聖地が残されている。とくに、宮城県伊具郡丸森町では、81基もの猫碑が見つまっている。(ただし、先にも述べた2019年10月12日の台風被害は、町の広い部分を土石流で埋めた。これにより、猫碑も行方不明になったものも多い⁴⁾。幸

3) <https://www.gsi.go.jp/kikakuchousei/kikakuchousei40182.html>

4) 河北新報2019年10月30日付「『猫神さまの町』ピンチ 日本一多い宮城・丸森の供養碑被災 東北最古も失う」(https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201910/20191030_13026.html)



図2 丸森町の猫碑（左：中島神明社，右：愛敬院 遠藤撮影）

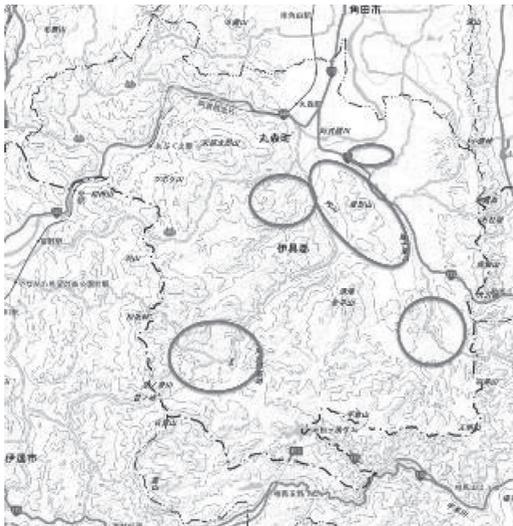


図3 丸森町〈猫聖地〉分布（遠藤作成）

いにも東北最古とされる猫碑は発見された⁵⁾が、災害が古い暮らしの記憶を消していくことには抗えない)。

図3に丸森町における猫碑，猫像の分布を示す。石黒（2017）によれば、猫碑は「地区別では、大内が最も多く三二基，次いで丸森の二七基，筆甫六基，金山六基，耕野二基」であり、「ほとんどは阿武隈川の南，南東部に分布し」，「川

5) 河北新報，2019年12月8日付「東北最古の「猫神さま」泥の中から発見 台風19号で被害の丸森」(https://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201912/20191209_13023.html)

の流域では、錐子尾川・内川・五福谷川の流域沿いに多くみられる。また猫像は、「筆甫五基、丸森と金山が各一基」あるが、近隣の「福島県伊達市梁川町では六基」「角田市君萱の薬師堂に二基、蔵王町円田の個人宅で一基」見つかっているという。

また、丸森町内の猫神社としては、伊具郡丸森町大張大森字中平の個人宅に祀られている猫神様、伊具郡丸森町廻倉の猫神社（文久2年と書かれた猫が描かれた石碑、現在は三峰神社）、伊具郡丸森町耕野の不動堂（ご神体は不動明王像。養蚕の神様とされ、招き猫が奉納されている）の三社があるという。

丸森町と養蚕

すでに遠藤（2015, 2017, 2018, 2019）でも論究したように、猫聖地については、一般に、養蚕業との関係によって説明されることが多い。実際、「養蚕神社」あるいは「蚕影神社」で、猫にまつわる護符が配付されていたり、石碑や石像が残されていたりすることは多い。（とはいえ、「蚕神」として祀られるのは、ほとんどが女神像である。「猫」は、むしろ「鼠除け」の呪物として用いられることが多い）。

丸森町を含む阿武隈川流域も、古くから養蚕で栄えた。阿武隈川流域で養蚕が盛んであった理由の一つとしては、阿武隈川の氾濫が桑の生育に有利であったことが挙げられるかもしれない。大迫（1965:361）は、「堤外の氾濫原では、桑は他の普通畑作物よりも洪水被害が少ないという消極的理由のほかに、沈泥によって土壌が肥沃となるために桑の生育がよく、きょうそ病が少ないといった積極的な条件もあって、桑が根強く栽培されている」と論じている。2019年10月の台風被害（阿武隈川氾濫被害）は、まさにこの地が養蚕に適していることと表裏の関係といえる。

『丸森と養蚕』によれば、伊達政宗が元和6年（1620年）に竹木条令で養蚕を奨励し、貞享3年（1686年）に仙台藩主四代綱村が「御蚕事係」を新設し、さらに正徳年間（1711～15年）に京都から織物師（小松弥右衛門）を招き、

絹織物を生産するようになって、仙台藩でも養蚕が盛んになったという。一方、「福島伊達地方は、養蚕が盛んで慶長10年代（1605～14年）後半には村々に「桑木が有り」とすでに養蚕が行われており、梁川では正保年間（1644～48年）から定期市が開かれて真綿、絹糸などが売買されていた。また「丸森町の養蚕業は、耕野の道目木屋敷小野孫十郎が」伊達郡の養蚕を目標として尽力し、「正徳元年（1711年）には市の開かれている伊達地方に、伊具・亘理地方の絹糸が移出されるようになった。「絹糸や繭の多くは仲買人を通して伊達地方に売られ、京都に移出され」た。「幕末になって開港すると、絹糸は日本最大の輸出品となり生産が奨励されて、農民にとって現金収入の大きな源として農家の養蚕意欲が旺盛にな」った。

丸森町の製糸工場と養蚕業

明治に入ると、政府は養蚕、製紙工業を主要な殖産事業として位置づけ、奨励した。同上書によれば、「明治10年3月には、仙台市大町一丁目に養蚕試験場を設置して、旧藩士や県内蚕業篤志者を募集し、食費・旅費などの経費を支給して、飼育方法の伝習などを行」った。「明治11年にはこの試験場を拡張し、更に宮城郡原町に養蚕稽古所を設置して試験場と同様の事業を行」った。丸森からもこれらの施設で学んだものが多く、その後の技術向上に貢献した。

明治19年（1886年）に、滋賀県出身の佐野理八が、それまで携わっていた



図4 佐野製糸場跡地（遠藤撮影）



図5 佐野製糸場工女の墓（遠藤撮影）



図6 『奥州の蚕業 第36号』に掲載された八雄館の紹介と蚕種の広告（遠藤蔵）

福島二本松製糸場を人に譲り、金山村に弘栄館佐野製糸場を建設した。フランス製ケンネル式鉄製器械新式（120釜数）を購入した、県内初の本格的な器械製糸工場であった。日本初の富岡製糸場の建設は明治5年（1872年）である。最盛期には従業員250名余で、県南部の繭から12tの生糸を生産し海外に輸出していた。佐野製糸場は、その後、世界恐慌の余波により昭和11年（1936年）に閉鎖されたが、丸森町の養蚕業発展の大きな契機となった。

明治二五年には、「丸森村の八巻雄三郎1が蚕種業「八雄館」を創立し、その後勝運にも恵まれて大いに発展した。そのころから蚕種業は興隆期に入り、明治二七年の伊具地方における蚕種製造業は、鑑札所有人員三七四、製造人員一一二、製造額七七三一枚に達し、県内全体の六〇パーセントを占めた」（『丸森町史』 p.534）。『奥州の蚕業 第36号』には、八巻の事業が、その豪壮な館の図と共に、大々的に紹介されている。⁶⁾

丸森町の養蚕業はその後着実に発展していく。『丸森と養蚕』は次のように記している。

6) 八巻家の初代八巻平右衛門は、正徳元年（一七一―）、丸森で養蚕業を始めた。（『丸森町史』 p.334）



図7 丸森町養蚕業推移 (データ出所:『丸森と養蚕』, 遠藤がグラフ化)

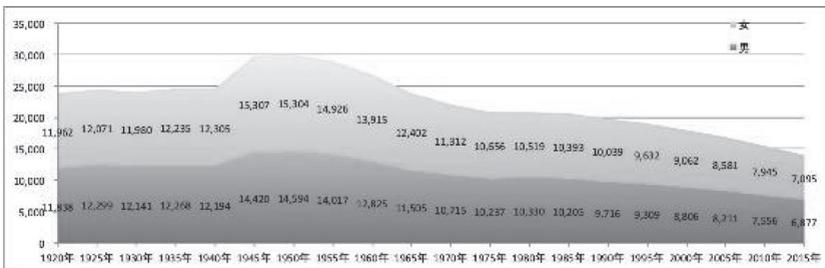


図8 丸森町人口推移

大正期に入ると丸森の養蚕は、大正元年の養蚕農家数約1,767戸、産繭量約257tから大正14年には養蚕農家数約2,051戸、産繭量約488tと大幅に増加しました。

昭和に入ってから、第一次世界大戦以前の蚕糸業は、世界の経済変動の影響も受けることもなく順調に発展し、大戦以後はアメリカの戦時景気の余波を受けて需要も急増しました。(『丸森と養蚕』 p.6-7)

しかし、昭和に入る頃から、丸森町の養蚕は停滞を始める。やがて始まった戦争は、村の生活自体苛酷なものとした。戦後、養蚕業は再生の道を踏み出し、昭和30年代には、成熟期ともいえる隆盛を誇った。だが、昭和40年代に入る頃から、日本の産業構造が繊維工業を主軸としたものから、製鉄や自

自動車など重工業へとシフトし始めた。その結果、丸森町の養蚕業も急激な衰退を始める。図7には、その経過が如実に表現されている。

産業の衰退は、町の人口とも強く関連している。図8からもわかるように、戦後のベビーブームで一時的に人口が急増するが、その後は都市部への流出もあり、減少の一途をたどっている。2015年時点ですでに、大正初めに比べてほぼ半減の状態である。

阿武隈川と養蚕業

丸森町における養蚕の最盛期、製糸工場を開いた佐野理八以外にも、この町には富み栄えた家々があった。中でも、いままも広大な建物が保存されている「齋理屋敷」(図9)は、当時の栄華を偲ばせる。「齋理屋敷」とは、丸森町の資料によれば、七代にわたって豪商として栄えた齋藤家の屋敷で、齋藤家の歴代当主が齋藤理助を名乗ったことから齋理と呼ばれている。敷地は6535平方メートルにおよび、往時の居宅1棟と蔵6棟、石造りの浴室1棟に加えて、現在は、丸森町が新築した建物2棟の合計10棟が立ち並んでいる。県道45号線に面した店蔵は、1848年(嘉永元年)に建てられた建物である。

加藤(2001)によれば、初代は文化元年(一八〇四)に呉服屋を始め、「三代目の時に、明治を迎えたが、そのころには味噌・醤油の醸造・販売、質屋、金融業も営んでいた。幕末から明治にかけては、繭や生糸、米の相場が当たり、毎年一万両ずつ財産を増やしたという。明治以降は、この地方きっての大地主にも成長した。製糸工場を建設し、電力会社を設立し、小学校建設にも尽力した」という。

現在では付近に人影も少ない町(図10)に、かつてはこれほどに富み栄えた豪商がいたということには改めて驚かされる。同様に、近隣の角田市、村田町、伊達市などにも、かつての繁栄の面影をとどめる屋敷が随所に残っている。地方の「限界集落」化が危惧される今日、地方都市の盛衰のプロセスという視点から改めて現代日本の深層を考える必要があるのではないか。



図9 現在の齋理屋敷正面（遠藤撮影）



図10 齋理屋敷前の街道（遠藤撮影）

齋理に富をもたらした大きな要因は、阿武隈川の水運であった。『丸森町史』には次のように記載されている。「阿武隈川は、栃木県境の福島県白河郡にその源を発し、福島県を縦断、多くの支流を集めて丸森に入り、更に下って亘理郡荒浜で太平洋に注ぐ全長339.3キロメートルの大河である。この大河は、交通機関の少ない時代だけに、舟で大量の荷を運ぶことができたので、最上、北上に次いで東北の運漕に大いに役立った。（p.346）」「後に丸森舟場、金山原町、小齋亘理町などが河岸となり、藩政末には、丸森舟場が船頭たちの休み場となり、数件の宿屋・飲み屋などがあり、大変なにぎわいを見せた（p.350）」。

そんな風景を、今の風景から呼び覚ますのは困難である。それでも、現在のそこかしこに古い時代が埋め込まれている。「猫碑」もそのあえかな露出なのかもしれない。

4. 塩の道と川の道

阿武隈川の水運—阿賀野川・信濃川・千曲川との連携

阿武隈川は、養蚕業に関わる商品を搬送しただけではない。齋理の事業内容からもわかるように、多種多様な商品の運輸に関わった。

特に重要なのは、米と塩である。前掲書によれば、「寛文四年（一六六四）に、米沢藩の家禄半減されたことにより、信達地方が天領となり、この地の

貢米の江戸への回送が本格化されたことに伴い、ますます阿武隈川の舟運が着目されるようになった」(p.347)⁷⁾。

ただし、舟運に先行する陸運を忘れるわけにはいかない。丸森町史によれば、「近世前半から開けていた主な道には、(1)柴田郡槻木(白幡橋で奥州街道と分かれる—角田—丸森—峠(丸森)—伊達郡への道、(2)角田—金山—大内—相馬領への道の二本があった。またやや遅れて阿武隈川の水運が盛んになるにつれて、(3)角田—立山村—川張村(前田)—耕野村(沼の上—大坊木)—伊達郡への道が大いに利用されるようになった」(p.342)。さらに、文化元年(1804)、古町から現在の本町・横町に町場替えすると、商家が立ち並んで賑わう地域となった。

周辺の農家では養蚕が盛んに行われ、生糸やこれを原料とした織物が生産され、更に和紙の製造が多くなるなど、漸次産業が発達するにつれ、桑苗などの原料・資材の購入や生産物の販売など、交易の範囲も拡大されるにつれ、人の行き来も多くなった。

伊達郡からは養蚕・糸取技術の導入と共に、桑苗・蚕種など、海産物の背負子商によって木綿・古着などが運ばれ、大内を經由しての今泉浜の塩(宇多塩)、荒浜に海上輸送された瀬戸内の才田塩(江戸深川の倉庫経由)が各々金山・阿武隈川を通して移入された。

一方、産物の生糸や鮭は伊達郡へ、生糸はそこから更に京都の機業地へも向けられた。丸森・大倉・川張・耕野の和紙は、仙台や白石・梁川へ販売し、余った原料の楮は名取郡に送られている。薪は塩焼き用として阿武隈川を利用して亙理郡に運ばれたこともあった。また宇多郡の各浜から砂鉄を運び盛んに製鉄した筆甫は、年貢鉄として仙台へ駄送し、耕野のは御用鉄として米沢・二本松へも出荷し、耕野産の柿は沼の上問屋を経て売られている。(『丸森町史』p.343-4)

いまは落ち着いた自然に囲まれた地域は、かつては、交通の要衝として、

7) 舟運の発達には、陸運の窮乏を招いたとも同書は指摘している。

製鉄から葉酸まで多様な生産の地として、賑わっていた様子が窺われる。そして、「道傍や村の入り口に道祖神や庚申・馬頭観音などの碑を建てた。今町内には約四〇〇〇を数える古い碑が残されている（同上書、p.344）」猫碑もまた、こうした過去の生活を今に伝えるよすがといえる。

塩の道

上記引用からもわかるように、丸森は、太平洋岸で生産された塩を内陸部に運ぶ結節点として重要な位置を占めていた。平島（1975）によれば、「磐城ノ国（福島県）の内陸にある福島・郡山両盆地一帯への塩移入は、阿武隈川の舟運によっていた。阿波や赤穂の瀬戸内塩が、江戸経由でできていたが、地塩として阿武隈河口の荒浜があり、相馬地方には松川浦原釜、その他、釜のつく地名のところがあちこちにあって、それらのところでは塩づくりが行われていた。地塩に準ずるものとして渡波塩も運ばれてきていた。福島盆地では、相馬塩の名が高く、塩と呼ぶかわりに「相馬」と呼べば通ったほどであった。相馬塩の一部は馬背で大沢峠越えで金山町に達し、そこから川船に積まれて阿武隈本流を荒浜から洲航してきたものと合流、丸森までは大船が行っていた。そこからは小船にかわり、梁川を経て福島に達した（p.130）」。

塩は最も重要な産品であり、塩を運ぶ道は「塩の道」と呼ばれた。「塩の道」は、塩以外のさまざまな生産品を含め、沿岸地域と内陸の盆地地域、太平洋側の地域と日本海側の地域、江戸や京都と地方都市をつなぐ役割を果たした。

また、「塩の道」は、陸路だけでなく、縦横に流れる川の道と山の道をつなぐ形でそのパフォーマンスを発揮していたことも忘れてはならない。平島（同上）は、「福島・郡山・会津盆地と米沢盆地との関連は、太平洋岸から日本海側の酒田港や新潟港との間に最上川・信濃川・阿賀野川を介し、山あいの峠越えに牛馬をまじえ、交錯していたものと会津には新潟から出発して、信濃川から阿賀野川へ移り、津川河港まで洲航、そこで陸揚げし、鳥井・藤の両峠をへて坂下、あるいは喜多方へ入っていた。越後の新発田藩と会津藩は、塩とローソクを交換品にしていたが、この交換に関して争いが生じ、一



図11 阿武隈川・阿賀野川・信濃川・千曲川の流れ⁸⁾

時、品物が途絶したこともあったようである。奥会津は野州（栃木県）にも接していた。」（平島1975：P.130-1）と述べている。

阿武隈川・阿賀野川・信濃川・千曲川流域と〈猫聖地〉

陸路と水路から構成される「塩の道」にそって、阿武隈川・阿賀野川・信濃川・千曲川流域には多くの〈猫聖地〉あるいは猫伝承が残っている。表2にその主なものを示す（猫伝承の類型については、稿末の「付表」参照）。このような地理的近接性の理由としては、(1)「塩の道」によって説話が伝播した、

8) 阿賀野川については必ずしも正確ではない。

表2 東日本の主な猫伝承

伝承地	内容
青森県蓬田村中沢	猫碑の北限 (石黒による)
秋田県安仁町	「化け猫」伝承
岩手県陸前高田市矢作町、猫淵神社。	鼠除けと養蚕の神。猫絵馬、猫の木像、鼠除お札
岩手県一関市花泉町 旧蚕養神社	「神猫」を祀る養蚕守護の神様
岩手県一関市川崎町、銚子浪分神社	瀬織津姫伝承
岩手県 二戸郡 福蔵寺 猫塚碑	「猫檀家」伝承
岩手県気仙沼市 青龍寺	「猫の報恩」伝承
岩手県水沢市 正法寺	「猫絵と鼠」伝承、「猫の鼠退治」伝承
岩手県奥州市胆沢区南都田 白髭神社。	東北最古の猫供養碑。(石黒)
宮城県栗原市高清水字西中里、根本薬師	向かい合う猫を彫った横額(石黒)
宮城県黒川郡大和町吉田字根古 根古の森の猫神社	「鼠除け」の猫神、猫像の倍返し
宮城県石巻市田代浜字仁斗田 美與利大明神	漁業神としての猫神、「去る猫」説話
仙台市若林区南小泉 猫塚古墳 少林神社	「猫と美女(蛇退治)」説話
宮城県角田市小田字斗蔵 猫神社	白山神社の境内社。神体は猫の木像。蚕神
宮城県角田市梶賀字西一番 猫神社	「猫と美女(蛇退治)」伝承
宮城県丸森町字中平北、狐塚墓地	猫図像・「猫神」碑
宮城県丸森町金山字台町、台町古墳群	猫図像碑
松沢山光明院 丸森町大内字砂田 152	股本供養と猫碑(武田(1973) p.8 参照)
宮城県丸森町字中島、天神社。	猫神碑
宮城県大和町吉田字根古北 猫神社	神体は猫碑。蠶蚕の神様。素焼猫の倍返し
福島県福島市御山 西坂稲荷神社(ねこ稲荷)	御坊狐とともに鼠退治
福島県石川郡石川町字猫啼 猫啼温泉 石都々古和気神社	豪族の子「玉世姫」(和泉式部)が京に上る際に、置いていかれた猫が啼き続けた。
福島県郡山市逢瀬町河内字猫神	江戸時代の初めから「猫神」と呼ばれていた板碑
福島県川俣町西福沢字合国場、猫稲荷 神社。	当初は稲荷神社。明治4年に、地主らが養蚕守護・鼠除けの神として猫稲荷神社に変更。猫絵馬
福島県二本松市箕輪、桐ノ木内 猫稲荷神社	明治7年(1874)段階では稲荷神社。蚕安全の神。毎年、2月2日の祭日には、猫の絵が入ったお札が氏子へ配布される。現在は、「猫返し」飼い猫が行方不明になった際 その猫の絵を社殿に貼って祈願すると見つかることされる
福島県伊達市霊山町下小国 八雲神社	社殿の中に、岩に彫られた一対の猫像。猫の絵が入った、鼠除けのお札。「化け猫」(棺桶、赤岩)伝説近隣には「猫」の文字を含む地名が多数存在
福島県下野寺 猫魔観音	「猫の託宣」「化け猫退治」伝承
福島県方木田 猫稲荷	養蚕神(鼠除け)
福島県磐梯町 猫魔ヶ岳	「化け猫退治」「猫女房」「猫の王」伝承
福島県三春町	三春藩お家騒動 「棺桶猫」「猫檀家」「火車猫」
山形県高島町 猫の宮	「猫女房(蛇退治)」
新潟県長岡市森上 南部神社	「新田触れ」の伝承 鼠除けのお札

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——

新潟県南魚沼市浦佐 2495 普光寺毘沙門堂	「化け猫退治」伝承
新潟県南魚沼市大崎 3746 八海山尊神社	ねずみ除けのお札
新潟県西蒲原郡弥彦村弥彦 宝光院	「猫多羅天女」
新潟県南魚沼市雲洞 660 雲洞庵	「北高和尚と火車落としの袈裟」伝承
新潟県上越市大町 1丁目 3-33 土橋稲荷神社	「猫又退治」伝承
新潟県阿賀野市	「猫の報恩」
佐渡	「猫の報恩」
栃木県日光市 日光東照宮 眠り猫	
栃木県日光市独鉦沢 金花猫大明神	「猫股（赤石）」伝承
群馬県吾妻郡長野原町与喜屋 猫石明神 養蚕神社	養蚕神 「猫石信仰」
群馬県高崎市鼻高町の少林山達磨寺	「猫の塑像」
上野（群馬県）の新田岩松氏	岩松家の当主たちの描く「猫絵」
茨城県結城市山川地区 猫塚	「猫退治」
埼玉県深谷市人見 昌福寺	「猫檀家」「棺桶猫」
埼玉県寄居町 少林寺	「踊る猫」「棺桶猫」「絵から抜け出る猫」
立川市砂川町 4-1-1 蚕影神社（猫返し神社）	蚕の害獣である鼠の天敵として猫を祀る。猫返し
東京都青梅市 常保寺	猫地藏（招き猫の石像）。
東京都青梅市梅郷巖山 金刀比羅神社	猫神 「陶器の招き猫」
東京都新宿区 自性院	「猫檀家（太田道灌）」伝承、「愛猫塚」、「猫地藏」
港区 大信寺	「愛猫塚」
墨田区両国 回向院	「猫の報恩」伝承、猫塚
土手の大哲	「猫と美女」伝承、猫像
台東区 浅草・今戸界隈	「猫の報恩」伝承
台東区谷中 永久寺	「愛猫塚」（仮名垣魯文）
世田谷区 豪徳寺	「猫檀家」伝承 招き猫
神奈川県横浜市金沢区 称名寺	「唐猫」「猫像」
神奈川県横浜市泉区中田地区 「猫の踊場」	「踊る猫」伝承
静岡県青田方郡函南町 函南猫踊り	「踊る猫」伝承
静岡県御前崎市御前崎 猫塚	「猫檀家」「鼠合戦」伝承
山梨県甲斐市竜王 慈照寺の猫塚	「猫檀家」「棺桶猫」伝承
長野県東筑摩郡坂井村修なら山 安宮神社	「鼠合戦」伝承
長野県上田市丸子町 猫石	「猫の道案内」「猫石」伝承
長野県長野市篠ノ井塩崎 軻良根古神社	「鼠合戦」伝承
長野県上水内郡小川村 法蔵寺	「猫檀家」
岐阜県高山市 高山陣屋の猫石	「猫と美女」伝承、猫塚
岐阜県高山市江名子町 荒神社	「猫石」
富山県下新川郡朝日町沼保 佐味神社	「猫の宮」（旧称）
富山県下新川郡 猫又山	猫股伝承（実際にいた）
石川県輪島市三井町 龍昌寺（猫寺）	「猫の報恩」【愛猫塚】【遊郭】【狛猫】
福井県福井市宝永 袋羽明神	【化け猫退治】【猫塚】
福井県坂井郡三国町崎	「猫絵描き」「鼠合戦」伝承



図13 蠶養守護神 衣襲明神
真影（常陸国鹿島郡日向川
村蠶霊山千手院星福寺）（遠
藤蔵）



図14 南部神社 猫の狛
犬（新潟県長岡市）（遠藤
蔵）



図15 猫のお札（鼠除け）
左：南部神社，右：八海山
尊神社（遠藤蔵）

る。そしてさらに近代に入って、製糸・紡績の工場で働く労働者が基本的に女性——いわゆる「女工」であったことも、こうした歴史を背景に置いて考える必要がでてくる。いいかえればそこは女性の職場であり、男性は監督はできてもそこには入ることのできない女性の世界だったと考えられる(22)。

それもあってか、明示的に「蚕神」とされている神の表徴は、図13に示すような女性神（「金色姫」など）であることが多い。

養蚕の神社における「猫」の位置づけは、あくまで「鼠除け」というつながりであるのが一般的と考えられる。ただし、では猫は蚕神の神使、あるいは土俗信仰の呪物にすぎないのかといえればそれもまたあまりに短絡的な結論であろう。

5. 猫の道と地方権力——古墳と山城

猫と縄文遺跡，古墳，山城

とすれば、すでに遠藤（2015，2019）などでも指摘したように、猫聖地の

表4 宮城県内の平成30年度埋蔵文化財包蔵地件数一覧 (一部)¹¹⁾

埋蔵文化財包蔵地の数			埋蔵文化財包蔵地の時代ごとの内訳							
市町村名	遺跡数	合計	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代
仙台市	青葉区(旧宮城町 139)	182	3	86	4	1	66	34	29	1
	太白区(旧秋保町 50)	328	5	131	37	89	145	115	27	
	若林区	72		3	11	28	31	39	11	
	宮城野区	109		6	4	20	44	64	12	
	泉区	91	1	50	3		21	32	11	
白石市	404		2	201	31	23	208	86	22	
角田市	192			44	5	57	96	67	11	
七ヶ宿町	77		2	68	5		7	7	1	
蔵王町	196		5	130	61	54	107	41	20	
大河原町	75			17	4	23	44	8	1	
村田町	182		7	85	51	38	56	29	8	
柴田町	95			43	10	17	50	23	3	
川崎町	87			56	10	8	29	13	10	
丸森町	168			97	20	23	37	3	4	
塩釜市	83			10	4	12	75	5	2	
名取市	184		2	38	34	96	83	26	18	
亘理町	96		1	26	19	18	73	11	2	
山元町	113			20	6	17	69	19	7	
岩沼市	68		1	18	10	30	28	20	11	
松島町	100			29	9	6	66	12	7	
多賀城市	43			11	5	10	31	22	9	
七ヶ浜町	47			20	14	10	29	5		
利府町	92			21	4	15	70	15	5	
大和町	117			53	2	11	47	28	17	
大郷町	49			6	1	12	7	23	3	
富谷市	59			26	5		19	21	7	
大衡村	87			43		1	50	7	3	

場所性について、「養蚕」との関係以外からアプローチすることも可能ではないか。前章で見た、川や峠道の境界性も、「養蚕」に限定されることのない、猫聖地に特徴的な地理的特性である。

しかしそれだけではない。ここでも、丸森町を起点として考えるならば、丸森町は県内でも埋蔵文化財包蔵地—すなわち歴史的遺跡が多数存在する地域なのである。表4は、宮城県の平成30年度埋蔵文化財包蔵地件数一覧であるが、丸森町が県内有数の埋蔵文化財包蔵地であることがわかる。さらに、丸森町では、埋蔵文化財の中でも、縄文期の文化財が多く発掘されていることにも注意したい。

丸森町の遺跡のリストを示したのが、表5である。これを見ると、遺跡の

11) 「宮城県の埋蔵文化財」(https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/miyagiisekitimeihyou.html)

表5 宮城県遺跡地名表 (平成31年3月現在¹²⁾、一部抜粋、筆者加工)

遺跡名	所在地	時代	遺跡名	所在地	時代	遺跡名	所在地	時代
泉皇宮	台町百廣跡	宇治町・平・金山	龜ノ子遺跡	大内字興休梁	縄文中	飯田古墳跡	大内字下田辺	古墳後
台助遺跡	金山下片山	縄文・弥生・古 銅・中世・近世	七夕遺跡	大内字七夕	縄文中	下田温福穴跡	大内字下田辺	古墳後
丸山御遺	宇矢沢・新田	中世・近世・縄文	舟島南遺跡	大内字舟島南	縄文中	龜崎穴遺跡	小内字羽山	古墳後・平安
姥遺跡	小内字姥	縄文後	吉田川遺跡	筆南字吉田川	縄文中	宮後古墳跡	飯久門字宮後	古墳後・奈良
姥遺跡上遺跡	大内字姥遺跡上	縄文前	飯田遺跡	筆南字飯田	縄文中	櫻川遺跡	小内字櫻川・一 の森	古墳中
車山3遺跡	筆南字車山	縄文前	石待遺跡	筆南字石待	縄文中	中塚遺跡	小内字中塚	古墳中
北丸遺跡	小内字北丸	縄文後・古	石神川遺跡	筆南字石神	縄文中	小宮山山前古墳 跡	金山字片山	古墳中・後
於瀧遺	宇治	縄文後・古・後・縄	立石遺跡	津野字立石	縄文中・古代	上片山古墳跡	宇治字片山	古墳中・後
葉栗西遺跡	大内字葉栗西	縄文後・古・後・縄	川前遺跡	津野字川前	縄文中・後	新町古墳跡	宇治町	古墳中・後
西草代遺跡	精野字西草	縄文前・古	泉遺跡	宇治下	縄文中・後	御津遺跡	小内字御津	古墳中・後・奈良
水沢遺跡	宇水沢	縄文後・古・後・縄	水沢田遺跡	宇水沢	縄文中	上山田遺跡	船岡町	古代
乳立根遺跡	大内字乳立根	縄文後・平安	門の内遺跡	津野字門の内	縄文中・後	長内遺跡	飯久門字長内	古代
石坂田遺跡	宇治反田	縄文後・古・後・縄	小岩根遺跡	宇水沢	縄文中・後	飯渡遺跡	金山字新田	古代
平瀧遺	大内字平瀧	縄文後・古・後・縄	小芥瀧水遺跡	小芥瀧水	縄文中・後・古・後・縄	横町遺跡	金山字北新田	古代
白田遺跡	大内字白田	縄文後・古・後・縄	津野遺跡	津野字津野	縄文後	宮山遺跡	船岡町	古墳中
笠倉遺跡	津野字笠倉	縄文後・古・後・縄	石塚遺跡	津野字石塚	縄文後	津波遺跡	船岡町	古墳中
宮田遺跡	大内字宮田	縄文後・古・後・縄	大久保遺跡	津野字大久保	縄文後	津ノ目遺跡	小内字津ノ目	古墳中
宮田遺跡	大内字宮田	縄文後・古・後・縄	大久保遺跡	津野字大久保	縄文後	熊島神社遺跡	小内字日向	古墳中
飯島遺跡	大内字飯島	縄文後・古・後・縄	火打石遺跡	宇水沢	縄文後	飯田遺跡	大内字飯田	古墳中
高野遺跡	精野字高野	縄文後・古・後・縄	早坂遺跡	早坂	縄文後	空平橋古墳	大内字空平	古墳中
余飯遺跡	大内字余飯	縄文後・古・後・縄	飯島遺跡	大内字飯島	縄文後	石神遺跡	大内字石神	古墳中
桂口遺跡	筆南字桂口	縄文後・古・後・縄	飯島清水遺跡	筆南字清水	縄文後	中平遺跡	大内字中平	古墳中
宮田遺	宇治	縄文後・古・後・縄	高野遺跡	精野字高野	縄文後・古・後・縄	大宮町遺跡	宇治町	古墳中・中世
下山山遺	筆南字下山山	縄文後・古・後・縄	玉置遺跡	宇治	縄文後・古・後・縄	大畑跡	飯久門字山田・ 小畑遺跡	中世
夕ヶ池遺	精野字夕ヶ池	縄文	大畑南遺跡	大内字大畑南	縄文後・古・後・縄	荒川跡	船岡町字荒川	中世
川原遺跡	精野字川原	縄文	東畑田遺跡	大内字東畑田	縄文後・古・後・縄	宮ノ下跡	船岡町字宮ノ下	中世
菟丸遺跡	精野字菟丸	縄文	飯島遺跡	大内字飯島	縄文後・古・後・縄	台町遺跡	金山下片山	中世
入山ノ下遺	精野字入山ノ下	縄文	吉田遺跡	筆南字吉田	縄文後・古・後・縄	町安跡	金山字山安	中世
殿石遺跡	精野字殿石	縄文	泉ノ入遺跡	大内字泉ノ入	縄文後・古・後・古・後・縄	小塚下跡	船岡町字小塚	中世
赤倉遺跡	精野字赤倉	縄文	修田遺跡	精野字修田	縄文後	小浜遺跡	船岡町字小浜	中世
橋跡	精野字橋	縄文	沼ノ上遺跡	精野字沼ノ上	縄文後	北山遺跡	船岡町字北山	中世
丸山遺跡	宇治	縄文	北町遺跡	小内字北町	縄文後	芥菜跡	宇治町・橋・ 北原田・大塚	中世
丸山遺跡	宇治	縄文	藤巻跡遺跡	大内字藤巻	縄文後	西山塚遺跡	宇治	中世
河跡	宇治	縄文	赤ノ宮遺跡	大内字興休梁	縄文後	西山跡	宇治町	中世
権五郎遺跡	宇治五郎	縄文	山王遺跡	大内字山王	縄文後	鳥居跡	宇治町	中世
飯島遺跡	大内字飯島	縄文	北山南遺跡	筆南字北山南	縄文後	西山跡	宇治町	中世
大泉清水遺跡	大泉字清水	縄文	三代河原遺跡	大内字三代河原	縄文後・古・後・古・後・縄	矢ノ野遺跡	小内字矢野	中世
飯ノ入遺跡	大内字飯ノ入	縄文	千賀田遺跡	大内字千賀田	縄文後・古・後・古・後・縄	赤小幡遺跡	小内字赤幡	中世
橋田遺跡	大内字橋田	縄文	塚倉遺跡	宇治	縄文後・古・後・古・後・縄	津波遺跡	大内字津波	中世
馬場遺跡	大内字馬場	縄文	上ノ石遺跡	大内字上ノ石	縄文後・古・後・古・後・縄	七倉跡	大内字七倉	中世
花ノ山遺	大内字葉栗西	縄文	大門前遺跡	大内字大門前	縄文後・古・後・古・後・縄	小幡跡	大内字小幡	中世
車山遺	筆南字車山	縄文	河原前遺跡	金山字河原	縄文後・古・後・古・後・縄	飯人跡	大内字飯人	中世
藤原遺跡	筆南字藤原	縄文・古・後・古・後・縄	寺内川田遺跡	宇治	縄文後・古・後・古・後・縄	新田遺跡	大内字新田	中世
藤原遺跡	筆南字大塚平上	縄文・古・後・古・後・縄	飯山遺跡	小内字飯山	縄文後・古・後・古・後・縄	圓山遺跡	大内字圓山	中世
紅川遺跡	大内字紅川	縄文・古・後・古・後・縄	下橋ノ作遺	大内字下橋ノ作	縄文後・古・後・古・後・縄	藤原跡	大内字藤原	中世
飯ノ入遺	大内字飯ノ入	縄文・古・後・古・後・縄	小外田遺跡	小内字小外田	縄文後・古・後・古・後・縄	又渡山跡	大内字又渡山	中世
大若山遺	大内字葉栗西	縄文・古・後・古・後・縄	伊手遺跡	大内字伊手	縄文後・古・後・古・後・縄	五七郎遺跡	大内字五七郎	中世
川田遺跡	筆南字川田	縄文・古・後・古・後・縄	飯渡遺跡	津野字飯渡	縄文後・古・後・古・後・縄	宮澤遺跡	筆南字宮澤	中世
百石山遺	大内字百石山	縄文・古・後・古・後・縄	大畑西遺跡	津野字大畑西	縄文後・古・後・古・後・縄	大塚遺跡	筆南字大塚	中世
馬場遺跡	筆南字馬場	縄文・古・後・古・後・縄	七夕遺跡	大内字七夕	古・後・古・後・縄	高松古墳跡	金山字高松	中世
日新田遺	金山字日新田	縄文・古・後・古・後・縄	越田遺跡	宇治	古・後・古・後・縄	深遺跡	金山字深	奈良・平安
芥土遺	精野字芥土	縄文・古・後・古・後・縄	矢ノ野遺	小内字矢ノ野・ 川	古・後・古・後・縄	羽山穴遺	小内字羽山	平安
芥土遺	精野字芥土	縄文・古・後・古・後・縄	越田遺跡	宇治	古・後・古・後・縄	百龍宮跡	小内字百龍北内	平安
上ノ石遺	精野字上ノ石	縄文・古・後・古・後・縄	山崎古墳	宇治	古・後・古・後・縄	長泉寺境内地蔵 (文庫)	大内字下田辺	近世
大塚平遺	精野字大塚平	縄文・古・後・古・後・縄	飯反古墳	宇治	古・後・古・後・縄			
松崎遺跡	小内字松崎	縄文・古・後・古・後・縄	種野古墳	宇治	古・後・古・後・縄			
塩水遺跡	大内字塩水	縄文・古・後・古・後・縄	高山古墳	宇治町	古・後・古・後・縄			

多い地域と猫聖地が重なり合っていることがわかる。すなわち、丸森、金山、大内、耕野、筆甫など、阿武隈川の南、南東部の、錐子尾川・内川・五福谷川の流域沿いに所在しているのである。また、これらの土地が、山地、丘陵、またその斜面であることにも留意したい。つまりこれらの土地は、古く縄文の頃から、人びとが定住した、「豊かな」土地なのである。豊かな土地には人びとが定住し、集落をつくり、地域の王が人びとを統治した。王の権力の残滓として、時代時代の遺物、古墳、城址があった。それらは時間に埋もれて生きつつも、うっすらとした集団的記憶が、強力なもの寺社の形をとり、あるいは、路傍の石碑として残ったとも考えられるのである。



図16 古墳の分布（「古墳マップ」¹³⁾）のデータより遠藤加工)



図17 塩の道¹⁴⁾

12) <https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/miyagiisekitimeihyou.html>

13) <https://kofun.info> (2019年11月閲覧)

14) 富岡儀八, 1983, 『塩の道を探る』岩波新書, vi

東日本の古代遺跡と猫聖地——

そこで視野を広げて、東北から中部にいたる広域の古墳分布を見たのが、図16である。これを見ると、塩の道（図17）と古墳分布がかなりの確率で重なり合っていることがわかる。それはつまり、古墳の分布と猫聖地の分布が重なり合っていることをも意味する。

そもそも「猫塚」とは、伝承では「猫を葬った墓（碑）」といわれることが多いが、「猫（ねこ）」と形容される「塚」（墓、周囲から盛り上がった場所、丘、山）と解することもできる。「ねこ」も動物の「猫」ではなく、遠藤（2019）でも指摘したように、「丘陵や台地の先端」を意味する、あるいはそこを居城とする地方権力を意味する「根古」であると解するならば、「猫塚」とは、丘陵や台地の先端に位置するかつての地方権力の墓（古墳）と了解することができる。これを裏付けるように、全国には、「猫」を冠した名前の古墳が多数存在しているのである（表6）。

表6 「猫」を含む名の古墳例

古墳名	所在地	備考
猫谷地古墳	岩手県北上市	小型円墳、平安時代
猫塚古墳	宮城県仙台市若林区南小泉	「猫と美女」伝承
猫淵横穴群	茨城県久慈郡金砂郷村	古墳時代末期七世紀頃の横穴古墳群
猫山遺跡	新潟県北蒲原郡京ヶ瀬村	弥生時代
猫橋遺跡	石川県加賀市猫橋	弥生後期前半の標識遺跡
柳田猫ノ目遺跡	石川県羽咋市柳田町	縄文～中世
猫作・栗山古墳群	千葉県成田市高岡 1500	5世紀半ば頃
軻良根古神社	長野県上田市・千曲市	周辺に多数の古墳がある
猫塚古墳	奈良県奈良市佐紀町	前方後円墳 5世紀初頭
猫塚古墳	奈良県御所市	中期初頭（5世紀初頭）方墳
猫塚古墳	奈良県五條市西河内	方墳 5世紀前半
猫山古墳	兵庫県尼崎市武庫之荘 9	古墳時代
猫山古墳	鳥取県倉吉市	四世紀
猫塚古墳	香川県高松市	双方中円墳
猫迫1号墳	福岡県田川市伊田 3847	円墳 5世紀前半
猫石丸山古墳	大分県豊後高田市	前方後円墳 古墳時代後期
猫塚古墳	大分県北部郡佐賀関町 (大分県大分市大字神崎)	四世紀後半

猫聖地の場所性

これらの考察によって、遠藤 (2015, 2019:82) が主として東京 (江戸) の〈猫聖地〉について指摘した以下の特性が、全国的に適用可能であることが示された。

- ・舌状台地の端 (しばしばダイダラボッチ (湖や山をつくったとされる巨人伝承) 説話が付随している) に位置する
- ・古墳跡であることが多い
- ・古代土器の出土 (赤土) している。
- ・土質は赤土で土器づくりに適している。
- ・中世城址であることも多い。

これらは、過去において、その地が地域権力の拠点であり、土師集団がいたことを暗に示している。すなわち、その地は人びとにとって古代聖地 (土着権力) のかすかな記憶を喚起する場所であり、またそのアイコンとしての形代をうみだしえる場であった。

ただし、上記引用の最後に述べている「赤土」は、主として「招き猫」に関連した〈猫聖地〉についていえることである。

丸森町など、猫碑や猫像の多く残されている地は、その原材料である石材 (しばしば花崗岩) が豊富な土地であり、土地によって、利用可能な資源を用いたと考えられる。ちなみに、東北から中部にかけての山間部は、堅い花崗岩の上であり、石像、石仏、石碑などが多数残っている。丸森でも、猫碑だけでなく、「庚申碑や二十三夜塔などのおびただしい信仰碑」(『丸森町史』p.344) がある。筆者が見た限りでも、丸森町の猫碑の多くは、単独であるというより、他の庚申碑や、蚕神碑、山神碑などと近接して祀られていた。

そこには、五来 (2007) が、「石の宗教」と呼ぶような原始信仰が潜んでいる。五来は、「石を宗教の対象また象徴とする場合 (p.18)」を次の4つに分けている。「第一は自然の石をそのまま手を加えずに崇拜対象とするもので、山岳宗教にはこれが多い (p.18)」。第二は石に加工はしないけれども、自然

石を積んだり、列や円環状に配列して宗教的シンボルや墓にする (p.18)」。 「第三は石の加工である。(中略) その加工も生活用具ばかりでなく、石棒や鋳形石や御物石器のような宗教用具も造られた。石棒はもと木製の男根形の棒(コケシの原形)を立てて祖先をまつたのが石製化されたいが、(中略)、これは中世から石地藏に置き換えられて、村境や広場に塞の神の代わりに立っている (p.20)」。 「第四の石の宗教形態は、石面に文字や絵を彫ることである (p.22)」。

猫碑や猫塚は、この第三、第四の形態に属する。

6. 猫ヶ岳と根の国

石神と蛇／狐／猫

以上から、〈猫聖地〉は、「石の宗教」あるいは「石神信仰」と深く関わっていると考えることができる。

折口 (1971) は、日本における石の信仰について、「神を溯ってゆくと、たまになり、たまから神さまという澄みきった考えに進んでゆくから、神さまの神さまたる力をば留めておくところが、石ということになる。石を神だと考えぬまでも、神を祭るためには、石の中に、たまがはいっているものとして、たまの所在である石を祀る。また、石の中にはいっているたまを祀る。だから、われわれの国のあらゆる社や祠の神体を調べると、石であることがたくさんある」と述べている。

また柳田は、「石神問答」において、蛇と石信仰の関係だけでなく、狐信仰との関係についても、「三狐神の誰にて三狐神は即ち御食神なりと云ふ説は『和訓栞』に見え候へ共 稲荷は常にシャグジと併存致し居り候」(柳田:28)と言及している。

そして本稿で見てきた「猫神」もまた、しばしば石像や石碑の形で祀られている。招き猫などの塑像も、擬「石像」と見なすことも可能である。猫信

仰の初期においては、願かけやその「倍返し」を媒介するものとして「たま」(石)が使われていたものが、後に猫像に替わった例もある。

「根の国」への眼差し

さらに、「石信仰」は、巨大な石(人工の古墳、塚なども含む)、あるいは崖、そして高山に対する信仰へとつながる。例えば丸森町でも、数基の猫碑を残している駒場滝不動尊愛敬院は、岬々たる巨岩群と峻烈な滝の流れる山の奥深くの修験道の寺院である。五来は、「修験道は神仙術の不老不死を理想とするように、不滅なるものを追求した。そこで不滅な存在とかがえられた石や巖を礼拝対象とし」(p.281)たと論じている。宗教学者の山折哲雄(1995)は、古代からの日本人の山岳信仰について、「山というのは死者の昇山である、それが第一番目。第二番目がさまざまな天上の神々が天下る霊場である。第三番目が山そのものが神であるという、神体山信仰ですね。出羽三山も、死者の霊が昇る山だった。天空に散在している神仏が降臨してくる霊山だった(140)」と述べている。そして、「インドの浄土教が日本に入ってきたとき、当時の日本人は、(中略)浄土は山の中に存在するというふう読みかえたんですね。この読みかえはもう平安時代から始まっています。山中に浄土が存在するというので、これを山中浄土と呼んでいる。山岳浄土ととってもいい」(142)と説明している。

「浄土」とは仏教用語であるが、仏教伝来以前の記紀神話において「根の国」



図18 丸森町駒場滝不動尊愛敬院

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし —— と呼ばれた空間に対応する。そこは、神々（あるいは祖霊）の住むところであると同時に、蜈蚣、蛇、蜂、鼠などあらゆる災いや罪、汚れの流しやられる所と考えられた。石信仰、あるいは山岳信仰はそびえ立つ峰々の彼方に「根の国」を遠望する眼差しであったといえよう。

猫と山岳信仰（石の道）

既述のように、「猫」（あるいは「根子」「根古）」という語を含む寺社名、地名は意外なほど多い。それとともに、「猫」（あるいは「根子」「根古）」の語を含む山岳も数多く存在する。

これらは五来のいう第一の石の宗教形態と考えることもできる。

たとえば、福島県の猫魔ヶ岳（猫魔嶽）は、芭蕉の「山は猫 ねぶりで行くや 雪の隙」の句で知られるが、その名の通り猫にまつわる伝説も伝えられている。かつて猫又が棲みついていたためこの名がついた、猫魔ヶ岳の食

表7 「猫」の名を冠した主な山

山の名	所在地	備考
猫山	秋田県鹿角郡	
猫魔ヶ岳	福島県耶麻郡磐梯町	「猫女房」伝承、「猫又退治」伝承、「猫の王」伝承、猫石伝説
猫塚山	伊達市月館町御代田	赤岩の猫塚 「猫の報恩」伝承、「化け猫退治」伝承、効験
猫山	新潟県阿賀野市	「猫の報恩」伝承（宮尾アイス）
猫又山	富山県上市町	「猫の王」伝承
大猫山	富山県上市町	
根古岳	長野県	長野県上田市菅平高原と須坂市の境にある山。
猫越岳	静岡県（伊豆山稜線）	
猫岳	乗鞍山系	岐阜県
猫岳	三重・滋賀の県境稜線	
根古峰	大阪・和歌山県の県境	
阿蘇山・根子岳（別名：猫岳、七面山、天狗峰）	阿蘇郡一の宮町と宮地町の境をなす山	「根小嶽ハ猫ノ窟ニ登ル山ナリ、依テ猫岳ト云、人家ノ猫ノ年ヘヌレバトンニウスル事アリ、是則窟ニ行タリト云、又猫岳ニテ豹程ノ猫ヲ見タリ鹿程ノ猫尾ハ8尺アルナドト皆々幼童ノ戯レナルヘシ、何ゾ此山ニ猫ノ謂レナシ」（「南郷事蹟考」）

料をネズミに食い荒らされて困っていた 慧日寺の僧がネズミ退治のため猫王を山に祀った, などである. また江戸時代後期の『新編会津風土記』(1803(享和3)年から1809(文化6)年にかけて編纂)は猫魔嶽について「磐梯山の西にあり, 高九十丈周二里計昔猫またありて人を食ひしとてこの名あり, 北の方に猫石とて其面暈の如くなる大石あり, 其下草木を生ぜず塵埃なく掃除せしが如し, 猫またすめる故なりと云, 四方に山遶り村落をさること遠し」との伝承を記録している.

また, 「磐梯山ジオパークサイト」(<http://bandaisan.xsrv.jp/C-20nekoishi.html>)によると, 「釣り上げた魚目当てに老女に化けた雌猫を桧原村の郷士(ごうし)が斬り殺したため, 山の主たる猫王はその奥方を食い殺して樹上に吊し復讐. 怒りの郷士が宝刀で妻の仇を討」った, などの伝承もある. かつて磐梯神社では猫魔嶽のお札を発行していた.

■阿蘇の猫岳

遠く離れた阿蘇の猫岳(根子岳)にも, 猫の王が住む山であるとの伝承がある. 小島(1999)は次のように紹介している,

猫岳の猫の王のことは, 古くは, 『肥後国誌』の阿蘇郡内牧手永の項にみえる. 『肥後国誌』は, 享保十三年(一七二八)に成った成瀬久敬の『新編肥後国志草稿』に, 明和九年(一七七二), 森本一瑞がやや増補した地誌である. その黒川村の条に, 五岳の一つとして猫岳をあげ, 猫岳には猫の王がすむので, 郡内の猫は年々, 除夜にはかならず, この山に詣でるといふ, と記している. 坂梨村(一の宮町)の村人の伝えといふ.

この猫岳の伝えは, 天保十二年(一八四二)成立の伊藤常足の『太宰管内志』下巻の四「肥後志」阿蘇郡南郷の条にもみえる. ここでは, 六, 七十年前にある僧が書いたという『塔志鱗筆』を引いている. 阿蘇岳の

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——
東に猫岳という山があり、この山には猫の王というものがすみ、年ごとの節分の夜には、阿蘇郷内三里あたりの猫が、みんなこの山に集まるといふ、とある

また、この『塔志随筆』に続けて、土地の人の話も記している。猫岳はきわめて大きな山である。この山には数百の猫がすんでおり、ときどき、その猫を見る人がある。二、三百も連なって歩く。そのなかには、いろいろな怪異な猫がいると語ったという。猫岳には、猫の王がいるというだけではなく、たくさんの猫がすみ、猫の社会があったとする伝えになっている。(p.51-2)

7. 猫島と海の道

西日本の猫聖地

さて、ここまで見てきた東日本の猫聖地は、養蚕と関わりのある伝承を持つもの、また山間部に伝わるものが多かった。

これに対して西日本では、養蚕とは直接関連しない猫伝承も多い。猫神と養蚕とは、あくまでも「鼠」という中間項を介したもののなかもしれない。

むしろ西日本では、仇討ちする猫、戦争に随伴する軍猫、商業の神、漁業の守護などとして祀られている。これらの伝承は、「山岳信仰」というよりも「海洋信仰」という方が適していると考えられる。

そして、「海」と「猫」といえば、近年の「猫島」ブームが思い浮かぶ。「猫島」とは固有名詞ではなく、「猫が多くいて、それを目当てに観光客が急にやって来るようになった島」一般に対する呼称である。愛媛県の青島や、香川県の青島など多くの島々が「猫島」と呼ばれている。

石巻市田代島の猫伝承

「猫島」は東北にもある。丸森町からさほど遠くない、同じ宮城県の石巻市田代島も猫島の一つである。

表8 西日本の主な猫寺社

猫を祀る寺社	伝承など
京都府京丹後市 峰山町泉 1165-2 金毘羅神社内「木鳥 (コノシマ) 神社」	文政13年(1830年)に、山城国(現京都市)の養蚕の神、木鳥神社から、地元ちりめん織業者らの信仰によって勧請。地元の糸商人や養蚕家達によって、一対の狛猫が奉納。
鳥取県鳥取市湖山池 猫島 猫薬師	「猫の仇討ち」伝承 「猫の報恩」伝承 鼠除け、失せ物に靈験
鳥取県東伯郡琴浦町別宮 転法輪寺	「猫の踊り」伝承 「猫の報恩(猫檀家)」伝承
徳島県八万町「王子神社」	当王子神社御祭神 天津日子根命様は、当地の根子神として祀られ、江戸時代阿波藩蜂須賀家家老の長谷川奉公家が代々崇敬。別称「猫神さん」。「阿波の猫騒動」(猫の仇討ち)
徳島県阿南市加茂町不ヶ63 「お松大権現」	お松権現は、有馬・鍋島と共に日本三大怪猫伝の一つとして名高い。
高知県須崎市箕越 「箕越猫神社」	愛猫を祀るとの伝承。病氣平癒
山口県萩市 雲林禅寺→天樹院	「鳴く猫」伝承⇒界限は「猫町(ねこのちょう)」と呼ばれる。雲林寺には、大小さまざまな猫の置物をはじめ、「猫みくじ」や猫の御守、猫の絵馬などがあり、「猫寺」と呼ばれている。
福岡県宮若市 西福寺(移転)「猫塚」公園	「猫の報恩」伝承
佐賀県杵島郡白石町 秀林寺	「佐賀の化け猫騒動」(「猫の仇討ち」伝承) 菩提寺の秀林寺に「猫塚」を建て、「猫大明神」としてまつた。
大分県臼杵市 福良211 福良天満宮内「福良赤猫社」	商業上の対立を治めた商人・大塚幸兵衛を「赤猫」とよび、彼の崇敬した稲荷社に「赤猫」を祀る。商業繁栄・家内安全・幸運招来に靈験
熊本県球磨郡水上村大字岩 野 生善院(通称・猫寺)	「猫の仇討ち」伝承
鹿児島県鹿児島市吉野町 仙巖園内猫神社	文禄・慶長の役の際、第17代島津義弘公は、朝鮮に7匹の猫を連れていき、猫の目の瞳孔の開き具合で時刻を推測したといわれる。この神社には、生還した2匹の猫の霊が祀られており、6月10日の時の記念日には、時計業者の人々がここに参集して例祭が執り行われ、また愛猫家のために猫長寿祈願と供養祭。

石巻港から船で四〇分ほどの沖合にある「田代島」は、各地の離島と変わらず、ここも人口が激減している。とくに東日本大震災の被害もあって、2015年の人口は82人(住民基本台帳人口, 3月末時点)にまで落ち込んでいる。

しかし、奇妙なことに、近年この島へ渡る船は多くの観光客で混み合っ

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——
おり、外国人観光客の姿も珍しくない。なぜか、この島が「猫島」だからである。

田代島には100匹以上の猫がいるといわれる。そのほとんどは「野猫」であり、飼い主はいない。島民たちが適宜猫に食料を与えている。ただし、「地域猫」のように地域で猫たちを共同管理しているわけでもなく、猫と人間がただ同じ空間を共有し、共棲している。

そもそも田代島を「猫の島」と呼ぶのは最近始まったことではない。1889年（明治22）に纏められた『田代管見録』（小野喜惣治・著）には、「茲地嘗テ野獸ヲ生セズ伝ヒ曰ク山猫アリ大サ犬ノ如ク夜間瘻出テテ怪ヲナス」と書かれている。柳田國男が大正15年に書いたエッセイにも「前年私がこの地方を通った時、田代という島は猫の島だという話を聞いたことがある。猫がどうしてこの島に住み始めたかは、もう話してくれる者もなかったが、近い頃にも小学校の休みの日中に、宿直室に寝転んでいた人がふいと起きて見ると、窓の外に窓いっぱいの顔をした大猫が来てうずくまっていたという」¹⁵⁾という記述がある。柳田はさらに昭和14年、「猫の島」というエッセイで田代島の猫伝説について論じている。「村長さんが祝宴の帰りに、夜どおし島の中をあるきまわって、すっかり土産の折詰を食べられてしまったとか、または渡し舟に立派な身なりの旅人が乗って来て、後で舟賃をしらべたら木の葉があったとかいう類の風説」¹⁶⁾はともかく、「これは古くからいわれたことらしいが、田代は猫の島だから犬を入れない。犬を連れて渡ると祟りがあると」という伝説に関心を寄せている。この犬の禁忌について、石巻市史六巻は「ニワタリ権現の存在とこれに伴う鶏の飼育、鶏卵食用の禁忌とともに特定の動物に対する習俗が形式化されていた」（p.580）と簡単な説明を載せている。現代では人びとは可愛さや癒やしを猫島の猫に求めている。しかし、かつての島人たちは猫を畏怖と尊崇の対象と考えていたのである。

15) 「松島の狐」（『東京朝日新聞』大正十五年八月）『柳田國男全集24』所収、p.450

16) これらの風説については、三原良吉、1930、日本放送協会東北支部編「網地島の山猫」『東北の土俗』三元社、p.19-28に詳しく述べられている。

田代島は珍しい猫神社があることでも知られている。その由来については、いくつかの説がある¹⁷⁾。一つは、田代島ではかつて養蚕が行われていたことから、鼠駆除に役立つ猫が祀られたという説。二つ目は、田代島では江戸期に大謀網が盛んとなったが、その番屋周辺に餌を求めて猫が集まり、漁師たちは猫の振る舞いから天候や漁模様の予測をしていた。あるとき、網の設置のために岩を崩していると、崩れた岩にあたって猫が死んでしまった。元締めは猫を懇ろに弔い、猫神社を建てたという。

これらの言い伝えによれば、この島では、猫は養蚕の神と漁の神の二つの相貌を見せている。いずれも、猫が島の産業と深く関わり合いつつ、人間たちと島で共棲していたことをうかがわせる説話である。

田代島でいつ頃養蚕がどの程度行われていたか、筆者は十分な資料を持ち合わせていない。しかし、猫神社が、養蚕産業と結びついて、とくに青森県・岩手県・宮城県・福島県・群馬県、長野県など、おもに東日本の地域に広く分布していたことが知られている（遠藤2017）。

とくに東日本大震災で大きな被害を受けた福島県信達地方¹⁸⁾は、「東北地方における養蚕製糸業の先進地」（『石巻の歴史 第五巻』p.493）であり、江戸時代中期には全国の蚕種生産高の半分以上を占めるほどの養蚕地帯であった。福島駅にほど近い信夫山には、猫神社なども残っている。

田代島と同じ宮城県では、「南部の伊具郡や刈田郡では幕末から明治初期にかけて一定程度の養蚕製糸業の展開」（同上）があったとされ、隣接する信達地方の商圈に組み込まれていた。先にも述べたように、伊具郡丸森町には現在も多くの猫碑が残っている¹⁹⁾。一方、「1885年（明治18）以降第三次生糸改良運動が県の主導で展開され」（同上、p.494）本吉郡や登米郡などの県北地方で養蚕業が活発化した。これらの郡は石巻に隣接しており、田代島で

17) <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10053500/0050/3639/3639.html>

18) 現福島市の大部分とその周辺から成る旧信夫郡と現伊達市全域と現福島市の一部から成る旧伊達郡を合わせた地域の呼称。

19) 桜田（1937）はすでに戦前に「死んで崇る時には猫神といふ石碑を樹てる（宮城筆甫）」と記録している。ただし桜田は養蚕との関連については触れていない。

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——
も農家の副業として養蚕が行われていたとも考えられる。

三陸漁業の繁栄—大謀網と田代角工衛門

一方、かつて田代島は三陸漁業の拠点として栄えていた。

田代島の沖合は北上する黒潮と南下する親潮がぶつかる好漁場で、沿海漁としては鮪（シビ）の大謀網漁（定置網漁）が盛んに行われた。「島の西側の漁場は、幕末から明治にかけて宮城県最大の大謀網漁場であった」と『石巻の歴史6』（p.575）は述べている。また『石巻の歴史5』によれば、「田代島に本格的に大網が開発されたのは中世末（十六世紀末）らしい」（p.578）。江戸期には村網で、一組が20～30人の組組織をつくり、部落の各戸がアゴ（網子—株主）として、完全な共同経営を行った。漁獲物は塩釜・石巻・渡波の港へ運んだ（同上）。

しかし、幕末になると、三陸の網経営は資本家的個人経営に移行していく。小松は、三陸海岸の網の経営者として知られる田代角右工衛門という人物について次のように記している。

三陸海岸の網の経営者として名高い角右工衛門は天明五（1785）年、南部、船越村川ノ浜で生れた。父の角左工衛門は廻船、舌網を持つ旦那衆の一人だった。

長じて大槌の名門前川善兵衛の娘エイをめとり、イワシ網からマグロ網経営へと転換した。

彼は牡鹿半脇の鬼島（田代島？（原文ママ））へ渡り、網の改良をはかり、大原の平兵衛を大謀として三年目に思いどおりの網型を完成したという。その網は従来の囲い網が不定全なので底網をつけて魚を逃さぬようになったとの説がある。小松（1974：136-7）

角右工衛門の経営する網（田代式大網）は、牡鹿半島から十五浜、雄勝、大須崎、下北半島まで展開した。その威勢は当時、「オラが旦那様め

でたい旦那嫌 お金の涌く網 ヤヨ建てておく」と俗謡に唄われるほどだったという(同上)。

奥筋廻船と平塚八太夫

田代島で生まれた立志伝中の人物として、もう一人、幕末に廻船経営に活躍した平塚八太夫(1805-1866)という豪商がいる。

佐々木(1996)、斎藤(2003)によれば、八太夫は田代島仁斗田の富裕な家に生まれ、航海術を学んだ。1835年(天保六)には、常陸国那珂湊の廻船主で豪商の濱屋(大内)五郎右衛門家の廻船・得宝丸の沖船頭(雇われ船頭)として蝦夷地交易に従事するようになった。八太夫は、一八四九年(嘉永二)、濱屋から独立する。この時の大内家の讓状には得宝丸と商売元手金とを合せて、千五百兩余の資産を譲るとある。八太夫は田代浜に戻り、ここを本拠として廻船経営をおこない、数年後には箱館に本店をもち、数艘の手船を運航して、蝦夷地・石巻・那珂湊・浦賀・江戸間を結ぶ交易活動に従事した。一八六一年(文久元)に八太夫は仙台藩から「蝦夷地物産方取開御用達」に任命され、蝦夷地—仙台間の物資輸送やラッコ皮の交易などにも進出し、巨万の富を築いた。

八太夫は一八六六年(慶応二)、出張先の銚子で病死した。しかし、彼の後を継いだ者たちは、明治期の地域振興に大きく貢献した。なかでも、八太夫の養子として函館出店の経営を任された平塚時蔵は、得た利益を函館の様々な社会事業に投資した。また、時蔵の末弟(のち養子)平塚常次郎(1881-1974)は、カムチャッカで漁業開拓を行うなか、新潟出身の堤清六と共同で堤商会(後の日露漁業株式会社)を設立した。その後、戦後初の衆議院選挙で当選し、運輸大臣も務めた。

田代角右エ門も平塚八太夫も、田代島を一つの足がかりとしつつ、幕末から明治期の日本にダイナミックな足跡を残した。田代島の猫神社も、彼らにゆかりの者が立てたのかもしれない。丸森町の斎藤理助や佐野理八と同様、日本近代は、彼らのような、地域の企業家たちによって推進されたのである。



図19 田代島（左：猫神社，中：田代島の猫，右：平塚八太夫屋敷跡

全国に散在する猫島

先にも述べたように、田代島のような「猫島」は、日本全国に分布している。

その多くは、本土から船で30～40分離れた離島で、近年人口が激減しているが、それに替わるように、猫が多く暮らしている。猫たちは人慣れしており、見知らぬ人間にも攻撃したりしない。そんな風景が、日本国内のみならず、海外からも多くの観光客を招き寄せている。

主な「猫島」を表9に示す。

猫島と古代信仰

表9から、昨今ブームの「猫島」の多くに古代遺跡がのこあされていることがわかる。また、かつて、海上交通のハブとして位置づけられていた島も多い。「猫島」は、必ずしも、たまたまその島で猫が増えてしまったというだけでなく、本稿で見てきた〈猫聖地〉の特性を、やや変形させつつも備えているのである。すなわち、次のようである。

- ・ 島（海からつきだした舌状台地）である
- ・ 古墳跡であることが多い
- ・ 古代土器/石器を出土している。
- ・ 漁業、軍事、商業の中継地であることが多い

こうしてみれば、「猫島」とは海の「山」であり、訪れる観光客に意識されていないとはいえ、意味的に対応する空間であるといえる。古い時代、人びとは切り立った山の彼方に死者たちの住む他界（根の国）を遠望したと同

表9 国内の主な猫島

島	備考
宮城県石巻市田代浜	人口60名。既述。
東京都新島村式根島	文時代中期の遺跡が発見されている。流入を八丈島へ運ぶ船が風待ち、新島の島民が猫の精製場や漁場として利用。「化け猫退治」伝承。大王神社は鼠除けの猫を祀る。犬は飼わない。「猫の王」伝承も。
神奈川県藤沢市江の島	1980年代頃から江の島の島では捨て猫が急増
愛知県西尾市佐久島	紀元前3000年頃から人が住み始め、縄文・弥生式の土器片などが多く出土。
滋賀県近江八幡市沖島	淡水の島で唯一の猫島。約250人が居住する有人島で、ネコが多く生息。戦国時代から水運の要衝。
愛媛県大洲市長浜町青島	もとは無人島で、寛永年間に隣の好漁場であるとわかり、1639年に人が移住。
香川県高松市男木島	隣に女木島 灯台 桃太郎 出雲系 豊玉姫
香川県三豊市志々島	両墓制の習慣が残されており、少なくとも中世以前までには集落形成されていたと考えられる。漁業の島としても栄え、寛政11年には島内で採れたナマコ120斤を中国へ輸出した記録も。
香川県仲多度郡多度津町佐柳島	集落は南部に本浦、北部に長崎がある。本浦・長崎集落ともに埋め墓と参り墓と呼ばれる両墓制が残っている
香川県香川郡直島町	古来より農業には向かない地形で、喜兵衛島に痕跡を留めるような製塩業に始まる瀬戸内の交通の要衝として漁業や交易、海賊（実際には、海難事故の多い難航を抑えての水先案内が主であったと言われる）で生計を立てていた。
岡山県笠岡市真鍋島	笠岡諸島に属する人口300人程の小さな島
山口県柳井市平郡（島）	一説では、木曾義仲の子「平栗丸(へぐりまる)」が島内に住み着いたのが島の名の由来。「蛇の池」、「五十谷」、「白鷺の鼻」など数々の伝承。幽霊船情報も
福岡県北九州市小倉北区藍島	日本書紀の仲哀紀に「阿閉島」として登場。隣接する無人島の貝島からは6世紀のものと思われる古墳群が発見。1705年(宝永2年)から1723年(享保8年)、響灘に密貿易の船が出没したため、小倉藩が遠見番所を建てた。
福岡県北九州市小倉北区馬島	古第三紀層から成っており貝やクジラの化石や、縄文時代前期から古墳時代の土器などが発見されている。標高34mの台地状の形、屈曲した複雑な形の海岸線。
福岡県糟屋郡新宮町大字相島	万葉集や続古今集にも歌われた歴史ある島で、貴重な遺跡や神社、玄界灘の荒波がつくった奇岩や絶壁などの景観
福岡県糸島市志摩姫島	玄界灘。近世に黒田藩の流刑地
佐賀県唐津市加唐島	神宮皇后の伝承が残る。百済の武寧王が生誕した島としても知られている。
長崎県五島市黄島	「旅の僧」伝承、「マリア観音」伝承 泊遺跡からは、縄文時代の土器片や黒曜石製の石器が出土し、古くから北部九州との交流があったと考えられる
大分県佐伯市蒲江（深島）	北方約7kmの屋形島との間にはサンゴ礁が発達 犬飼ってはならぬと言い伝え
熊本県上天草市大矢野町湯島	有明海の離島。「天草・島原の戦い」代表者が談合を行ったことから、別名「談合島」
沖縄県八重山郡竹富町竹富島	島の人口は365人に対して、猫は約60匹。竹富島の遺跡で最も古いものは無土器期のカイジ浜貝塚とコンドリ浜貝塚。その年代は12世紀と推定。新里村遺跡は、新里村東遺跡が12世紀頃、新里村西遺跡が14世紀から15世紀頃と推定
沖縄県南城市玉城字奥武（島）（おうじま）	かつて死者を弔った場所であったと云われており、いずれも崇められている。
沖縄県島尻郡渡嘉敷村字渡嘉敷（島）	先史時代から人の居住があり、舟越（ヒナクシ）貝塚などの遺跡がある。琉球王朝時代に優秀な船乗りを輩出。17世紀半ばには沖縄と中国を往來する船の監視を目的に座間味島・渡名喜島・久米島とともに烽火台設置

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——
様に、遠い海に浮かぶ離島の先に死者たちの国（沖縄においては「ニライカナイ」と呼ばれる死者／神の国）を幻視したかもしれない。そして、現代、猫の仕草に癒やしを求めて、「猫島」を訪ねる観光客たちも、知らず知らずに、そこに彼らの「他界＝根の国」を夢見ているのかもしれない。

8. 沖縄と猫

「猫島」と「青の島」

このように考えるとき、やはり近年「猫島」として知られる、沖縄県南城市玉城の奥武島（おうじま）にまつわる伝承は重要である。谷川によれば「かつて死者を弔った場所であったと云われており、いずれも崇められている。かつての沖縄では、人が死ぬと海岸のすぐ沖の小さな島に船で遺体を運んで、洞窟へと安置する葬送の習慣があった。洞窟の中が黄色い光に満たされていたことから、この島を「青（オウ）の島」（黄色のことを「青」とよぶ場合があった）と呼」（161）んでいたとされ、そこから「奥武（オウ）の島」と書かれるようになった。谷川（1999）は、同じく「青の島」の意味を潜ませた島として、奄美大島の対岸のカケロマ島（古老たちは「アロウ島」と呼んでいた）、八重山群島の新城島（あらぐすく島。「アロウスク」がなまったものと谷川は推測している）などを挙げている。

また谷川は、「宮古では、人が死んだらオウの島に行くと言っている。また、沖縄本島の東海岸にある伊計島の八月のシノグ祭では、「ネズミは奥武の島に飛び立てよ」という神謡がうたわれる。奥武は「青の島」のことである。これは虫送りの風習を述べたものである」（162）と述べている。

表9でも、愛媛県の青島、福岡県の藍島、相島、長崎県黄島など、「おうしま」「あおしま」などに近い音の島名をもつ「猫島」が多いことに気づく。現代の新奇な流行現象に見える「猫島」の背後には、「青の島」の記憶がほっそりたたずんでいるのかもしれない。

青の神としての猫神

一方、柳田国男は、「石垣島の方では川平と桴海の二村に、旧の八月または九月の己亥の日、よく似た儀式があってこれを「まやの神」と名づけ、マヤとトモマヤとの二神が出現する。マヤは方言に猫を意味するところから、普通は牡猫、牝猫の面を被って来るといふが、舞にも詞にも猫らしい信仰は現れておらぬ。阿檀の葉の蓑を着て蒲葵で編んだ笠を深く被り、戸ごとを巡ってやはり明年の祝言を述べる」（『海南小記』p.399）と書いているが、「沖縄本島北部の大宜味村の謝名城や喜如嘉の海神祭でうたわれる神送りの歌には、「マヤの神」の対語として「青の神」が登場する。マヤの神は真世の神とも称し、ニライカナイからの遠来神で、八重山のマユンガナシもその一つ」（谷川1999:p.165）なのである。

袋中上人と琉球

マヤの神に関連して、谷川は次のように、江戸初期の僧・袋中に言及している。「江戸時代初期の浄土宗の僧袋中の「琉球神道記」によると、君真物という海神は海底を宮とし、毎月出現して託宣する、とある。海神の君真物が久米島の奥武という小島に上陸した歌が「おもしろさうし」巻二十一に載っているが、この歌について伊波普猷は「ニライカナイの神が、一旦、奥武（奥）を足溜りとして、本土に上陸したことは正史などにも現われている」と述べている（琉球史料叢書「琉球国由来記」解説）」（谷川1999:166）。

袋中は、先にも述べたように、京都の〈猫聖地〉の一つである檀王法林寺の住職となった人物であり、沖縄の信仰と日本の〈猫聖地〉を結ぶ契機となった可能性があるかと筆者は考えている。

袋中上人（袋中良定、1552-1639）は、陸奥磐城郡（現在の福島県いわき市）に生まれ、幼時から才能を現し、長じては江戸増上寺や足利学校で学んだ。29歳の時故郷で住持を務めるが、51歳の時、渡明を決意する。しかし政治情勢によりなかなか叶わず、1603年に渡明の便船を待つため、琉球に渡る。琉球では浄土宗の布教に努め、念仏踊り（現在のエイサー踊りの起源とされる）

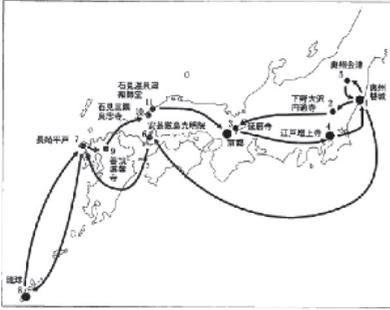


図20 袋中上人布教の遍歴²⁰⁾



図21 檀王法林寺の招き猫 (遠藤蔵)

も伝えた。しかし、結局、渡明はできず、1606年に帰国し、1611年、京都の梅檀王院無上法林寺（檀王法林寺）に迎えられた。（この経歴から、袋中が、本稿でも見てきた東北地方と沖縄にいたる「山の道」と「海の道」を自らの身体によって接続したことがわかる（図20））。

袋中上人は渡明を試みるうちに、華嚴經入法界品に説かれる娑珊婆演底主夜神（ばさんばえんていしゅやじん）のお告げを受け、帰国後、檀王法林寺にこの主夜神を祀った。信ヶ原ら（2011）によれば、「この主夜神の使者が黒猫であると、檀王法林寺は伝えており、黒色の招き猫が作られ、主夜神法要で授与されている（図21）。これは最古の黒色招き猫として知られ、ここ数年の猫ブームに相乗して様々な雑誌で取り上げられ、招き猫を求めて参拝する人々も増えている」という。

信ヶ原らは、「猫は古来より荒波を渡る船人たちに不思議な力があると崇められてきた。猫には暴風を察知する力があり、龍神に猫を捧げると風が治まるといような迷信から航海に出る際には、猫を必ず船に乗り込ませることが慣例となっていたようだ。また船内に積んだ宝物や書物、食料は頻繁に鼠の被害に遭うので、猫はその対策にも一役かっていたとされ、船上で猫は大いに重宝されたと考えられる。前述したように、袋中は未知の經典を求め、危険を冒して

20) 『檀王法林寺』 p.108

長い航海の旅にでた。彼が乗り込んだ船にも猫がいたことは間違いなく、荒波にもまれ数多くの危険にさらされた時に、華嚴経の中の主夜神を一心に唱え海中の安全を祈る中で、同乗の猫との間に何か心通うものがあったのではないかと考える。時には猫をひざの上に乗せて一心に主夜神に願っていたかもしれない。また主夜神信仰は、守夜神と転じて夜の盗難や火災などの厄難から守る神として人々の信心を集めてきたので、夜中にひっそりと見守る黒猫というのは、主夜神の使いとしてのイメージと重なり合う。」(『檀王法林寺』 p.97-8) と述べているが、それだけだろうか。沖縄のマヤの神(ニライカナイからの来訪神=猫神)と袋中の主夜神信仰およびその神使としての黒猫(緑の猫)との間には、何らかの連絡があるのではないかと。この点については、別稿にて改めて論じたい。

9. おわりに—埋め込まれた過去と現在

本稿での考察により、以下の事柄が明らかになった。

- a. 猫を祀る寺社、猫像、猫碑など、あるいは猫にまつわる伝承を持つ土地—本稿で言う〈猫聖地〉は、従来、養蚕業と結びつけて考えられてきた。しかし、猫という動物と養蚕とを結びつけているのは、むしろ、「鼠除け」という行為を解してと考える方が正確である。(このことは、遠藤(2019)で論じたように、猫と強く関連する狐や蛇などの聖獣も同様である)。
- b. 一方、〈猫聖地〉にかなりの確率で共通しているのは、川を見下ろす舌状台地の突端に位置し、敵の侵入を拒む要害の地であると同時に重要な道筋や山越えの峠など交通の要衝でもある。
- c. 日当たりが良く、古くから人が定住しており、そこを統治する地方王権が存在したことが、古墳や、城址から窺われる。このような地形は、古くから「根古」「根子」「根来」(ねこ)と呼ばれてきた。
- d. 以上から、「鼠除け」の益獣としての「猫」が、「根古」という同音語を媒介として、過去の王権の勢威／葬送地の記憶と結びつき、「死者の国(浄土／根の国／ニライカナイ)」への憧れと畏怖を喚起する〈猫

〈猫聖地〉の地政学的考察 —— 山の道と海の道、そして根の国へのまなざし ——
聖地〉として人びとの心に残り続けていると考えられる。

- e. また、「根古」に対する尊崇は、石神信仰と結びついており、石⇒タマ(玉, 魂, 霊)の関係から、猫の名として「たま」がよく使われてきたと考えれば、遠藤(2019)での考察を補完するものともいえる。
- f. さらに、石神信仰は、山岳信仰を一つの極点とする。地形的な意味(高山は、上記「根古」地形の極限ともいえる)からも、人の侵入を拒絶するかのようによびえる高山は、「根古の地」「根の国」(死者の赴く他界)としてイメージされ、同時に、しばしば「猫の王」の統治するアナザーランドとしても幻視された。
- g. 同様の他界信仰は、島嶼部における海島信仰としても現れる。海島は、海に浮かぶ「根古」であり、死んだ者たち／聖なる者たちが住む「根の国」として幻視されたのである。
- h. 「根の国」(沖縄におけるニライカナイはほぼ同義とされる)として幻視される島は、しばしば、「青(アオ／オウ)の島」と呼ばれるが、それはその島が古い埋葬儀礼と関わっていることを示す。そして、そのような痕跡を残す島々が、今日「猫島」として観光客を集めているのは興味深い。沖縄では他界神としての「青の神」が猫に扮装して共同体を訪れる風習が残っているが、それとの関係など、まだ検討されるべき課題は多い。

「現実」というものを捉えようとするとき、私たちはつい、まさに眼前にある、薄くスライスされた「現在(いま)」を特権化してしまう。いま「重要」と考えられている制度や人物の振る舞いを中心に、いま正当と考えられている理論枠組みに則って、私たちの生きている「空間」を理解しようとする。その結果、普通の人びとの日々の振る舞い、意識せずにしている慣習、何とはなしに心引かれるものたち、そうしたものは、流れる川に浮かぶ泡沫のように、意味もなく、取るに足らない、蒙昧によるその時限りの減耗であると見なしがちである。

付表 主な猫伝承の類型

伝承類型名	典型的な物語
猫と美女	美女(花魁、姫、奥方など)が可愛がっている猫が目にも余るほど美女につきまとい、厠にまでついていく。周囲がいぶかしみ、猫を殺す。すると猫の首が飛び、美女を狙っていた大蛇を殺す。猫の真意を疑ったことを悔やんで、猫を祀る。
猫の報恩	貧乏な家で飼っていた猫が、飼い主の貧乏や病気によって買われていた家を去るが、飼い主に報いる振る舞い(猫の像を売ることを勧める、金を盗んでくる、など)をする。猫は死んだり殺されたりすることが多いが、猫を哀れんで祀る。
猫檀家	貧乏寺の住職が可愛がっている猫が、通りかかった有力者(武将など)を招き入れ、その有力者が寺の檀家となることで、寺が栄える。
猫女房	妻(あるいは老母)の振る舞いがおかしいと疑っていると、実は猫が(本ものは猫に殺されている場合が多い)妻(あるいは老母)に化けて居るとわかり、猫を退治する。
猫の王	猫は年を重ねると、格を高めるために、高い山で修行する。そこには「猫の王」がいて、修行する猫たちを統率している。
猫又屋敷	道に迷った人間が訪れた屋敷で、女たちから手厚いもてなしを受ける。しかしその中の一人から、女たちに見えるのはみな猫又で、このままでは喰われてしまうと教えられ、命からがら屋敷を逃げ出す。
火車	葬式や棺桶、死体などに悪事を働く妖怪。しばしば猫が化けたものとされる。
猫鼠合戦	人間に恩義を受けた猫たちが、狼藉を働く鼠の大群を退ける。
猫岩	大猫が里の人びとを襲って困らせていたが、高僧(弘法大師など)や武勇に優れた武者が猫を退治する。殺された猫は(しばしば赤い)岩となる。
踊る猫	夜になると猫の姿が消えるので飼い主が訝しんで後を付けると、猫は仲間たちと一緒に二本足で立ち、踊っていた。その結果、猫を放逐する／猫が出て行く／見なかったことにしていままで通りの生活を続ける、の3パターンがある。

しかし、本当にそうだろうか？むしろ日々のよしなしごとの集積こそが、「生きられる空間」を構成するものなのではないか。それは、長い時間の中かで、埋もれていく地層のように、風化し、削られ、絶え間なく変化していくが、一方で、「人間とは何か」ということを知るための材料を提供するものでもある。

本研究は、近年の異常ともいえる猫ブームの深層に、古代からの「他界」観が潜んでいることを示した。今後さらに、その普遍性、局所性、時代性などについて、議論を深めていきたい

【補論】

一言追加的に述べておきたい。近年、猫ブームとともに、「ノネコ問題」も大きくクローズアップされてきている。われわれは、いま、動物と人間の共生について改めて検討することを迫られている。この問題については、遠藤（2019）で論じており、今後更に研究を進めつつある。同時に、本稿などで考察した、動物との歴史的・民俗の共生のあり方についての検討も、未来を考える上で極めて重要である。

【謝辞】

本研究は、科研基盤研究（C）「東日本大震災における社会関係資本を活用した復興政策についての研究」（研究課題番号16K04093）の助成を受けて行われたものである。

本研究は、一般財団法人櫻田会政治研究助成金の助成を受けて行われた。

【参考文献】

- 網野善彦, 1997, 「日本中世の桑と養蚕」『歴史と民俗：神奈川大学日本常民文化研究所論集』（14）, 7-29
- 鳥翠台北莖, 1807, 『奇談北国巡杖記』山形屋傳右衛門
- 伊達郡霊山町郷土史研究会, 1982, 『霊山・根古屋遺跡』福島県伊達郡霊山町

郷土史研究会

土井卓治, 1976, 『吉備の伝説』 第一法規

遠藤薫, 2008, 「近世・近代〈日本〉における〈時計〉受容のプロセス—グローバル化の二重らせん」, 『学習院大学法学会雑誌』 44巻1号, 2008年9月刊, p.313-358

遠藤薫, 2010, 「グローバル化の二重らせん—ヨーロッパ・長崎・江戸・日本各地を結ぶ文化的情報経路—」, 『2010年日本社会情報学会 (JASI&JSIS) 合同研究大会研究発表論文集』 p.18-23

遠藤薫 2015 「招き猫とは何か—近世都市伝説と始原神, およびその現代的意義」文化資源学会研究大会報告

遠藤薫, 2016, 「なぜいま, カワイイ」が人びとを引きつけるのか?」『〈知の統合〉シリーズ カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』, 東京電機大学出版局

遠藤薫, 2016, 「カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係—江戸期の猫ブームを例として」感性工学会「かわいい人工物」研究部会・〈知の統合〉シリーズ発刊記念公開シンポジウム講演資料

遠藤薫 2017 「近世における都市—農村・日本-世界の文化的交差— (近代)を準備した江戸の猫ブーム」『学習院大学法学会雑誌』 53-1号

遠藤薫 2018 「幕末から維新期における社会変動と大衆の無意識—招き猫と化け猫騒動—」『学習院大学法学会雑誌』 54-1号

遠藤薫 2018 「猫の島から東日本大震災を考える-越境する社会・越境する知」『学術の動向』 2018年4月号

遠藤薫 2018 「猫をかぶった猫たちへ」『Wendy-Net』 (<https://www.wendy-net.com/nw/essay/353.html>)

遠藤薫 2019 『近世日本における〈国家意識〉形成とアジア』 勁草書房

遠藤薫 2019 「目白と猫と太田道灌—野生との共生は可能か—」坂本孝治郎・編『エッセイコレクション2018』

遠藤薫, 2019, 「境界としての猫」『第92回日本社会学会大会』 テーマセッション

ヨン資料

- 遠藤薫, 2019, 「猫神の迷宮 —— 始原伝説と動物信仰の交錯と循環」『学習院大学 法学会雑誌』55巻1号
- 福島県立博物館, 1996, 『福島の山岳信仰』福島県立博物館
- 福島県立博物館, 1998, 『天の絹糸——ヒトと虫の民俗誌』福島県立博物館
- 福島市史編纂委員会, 1972, 『福島市史 第3巻 近世Ⅱ』福島市教育委員会
- 五来重, 1988=2007, 『石の宗教』講談社学術文庫
- 花見朔巳・校訂, 1970, 『新編会津風土記 第二巻』雄山閣
- 日野巖, 1979, 『動物妖怪譚』有明書房
- 平島裕正, 1975, 『塩の道』講談社現代新書
- 市古貞次, 1980, 『中世小説の研究』東京大学出版会
- 市古貞次, 1981, 『中世小説とその周辺』東京大学出版会
- 井出道貞, 1887, 『信濃奇勝録』孫通
- 池上正太, 2013, 『猫の神話』新紀元社
- 井上頼寿, 1933, 『京都民俗志』岡書院
- 石黒伸一郎・編, 2017, 『丸森町の猫碑めぐり』丸森町文化財友の会
- 石黒伸一郎, 2019.8, 「東北地方の猫神社と猫供養」村田町歴史みらい館 企画展「猫にお願い」関連講演会資料
- 石巻市史編さん委員会・編, 1988, 『石巻の歴史 第六巻』石巻市
- 石巻市史編さん委員会・編, 1996, 『石巻の歴史 第五巻』石巻市
- 磯清, 1927, 『日本民俗叢書 民俗怪異譚』磯部甲陽堂
- 雀庵長房著・室松岩雄編, 1910, 『さへづり草 むしの夢』一致堂書店
- 伊藤清郎, 1997, 『霊山と信仰の世界—奥羽の民衆と信仰』吉川弘文館
- 猪苗代町史編纂委員会, 1979, 『猪苗代町史』猪苗代町史出版委員会
- 岩崎卓爾編, 1920, 『ひるぎの一葉』, 浜崎莊市
- 鹿児島大学鹿児島環境学研究会, 2019, 『奄美のノネコ——猫への問いかけ』南方新社
- 加藤貞仁, 2001, 『東北おもしろ博物館』無明舎出版

川田 桂, 2010, 「沖縄宮古島ウヤガン信仰研究序説」『人間環境学研究 第8巻2号』

熊本県教育会球磨郡支会編, 1916, 『球磨郡郷土誌』熊本県教育会球磨郡支会

熊本日日新聞・編著, 『猫島ありのまま—上天草湯島』

小島瓊禮, 1999, 『猫の王—猫はなぜ突然姿を消すのか』小学館

小松宗夫, 1974, 『海鳴りの記—三陸漁業のあゆみ』宮城県北部鰹鮪漁業協同組合

野村純一, 2002, 「「老鼠姿親」と「逼鼠蚕猫」」『國學院雑誌』第103巻第1号, 42:60

丸井佳寿子・他, 1997, 『福島県の歴史』山川出版社

丸森町, 2019, 『広報まるもり』(2019年12月発行)丸森町

丸森町史編纂委員会, 1980, 『丸森町史 史料編』丸森町

丸森町史編纂委員会, 1984, 『丸森町史』丸森町

丸森発シルクロード計画推進委員会, 2008, 『丸森と養蚕—養蚕と共に栄えたシルクの町』

宮本常一, 1979=1985, 『塩の道』講談社

水原義人, 2015, 『宮守風土記』遠野文化研究センター

中井閑民, 1860, 『蚕種銘鑑』

仲松弥秀, 1990, 『神と村』梟社

大木卓, 1975, 『猫の民俗学』田畑書店

大迫 輝通, 1965, 「養蚕業地域の構造に関する比較研究—乗鞍山麗と西濃輪中」人文地理学会編『人文地理』17巻4号, 356:379 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjhg1948/17/4/17_4_356/_pdf/-char/en)

折口信夫, 1971, 「石の信仰とさえの神と」『折口信夫全集ノート編』第七巻, 中央公論社

斎藤善之, 2003, 「東廻り航路と奥筋廻船」藤田覚・編『近代の胎動』吉川弘文館, p.87-121

- 桜田勝徳, 1937, 「神佛に祀られたもの」柳田國男・編『山村生活の研究』民間伝承の会, p.426-443
- 佐々木淳, 1996, 「近世東廻り航路の買積船と港湾都市」, 村上直編『幕藩制社会の地域的展開』雄山閣, p.464-489
- 佐藤昌明, 2018, 『飯館を掘る—天明の飢饉と福島原発』現代書館
- 仙台市歴史民俗資料館, 1981, 『仙台市荒浜の民俗』仙台市歴史民俗資料館
- 信ヶ原雅文・石川登志雄, 2011, 『檀王法林寺袋中上人琉球と京都の架け橋』淡交社
- 高橋郁丸, 2010, 『新潟の妖怪』考古堂
- 武田直衛, 1933, 『七郷村史』宮城郡七郷村教育会
- 田中啓爾, 1957, 『塩および魚の移入路—鉄道開通前の内陸交通』古今書院
- 谷川健一, 1990, 『日本の神々』岩波新書
- 谷川健一, 1997, 『日本の地名』岩波新書
- 谷川健一, 1999, 『続・日本の地名』岩波新書
- 徳原聡行, 1987, 「袋羽明神とホロハ塚」茨城民俗学会『茨城の民俗』第26号, p.46-8
- 富岡儀八, 1973, 『塩道と高瀬舟—陰陽交通路の発達と都市の構造変化』古今書院
- 富岡儀八, 1978, 『日本の塩道—その歴史地理学的研究』古今書院
- 富岡儀八, 1983, 『塩の道を探る』岩波新書
- 四方正義, 1990, 「沖縄県における養蚕の起源について」『沖縄農業』, 25 (1・2) : 13-18
- 山口陸, 2016, 「県境を越えたもの, 越えなかったもの:宮城県丸森町筆甫地区における放射線対策」『東北文化研究室紀要』57巻, 23-39 (<http://hdl.handle.net/10097/00121489>)
- 山折哲雄, 1995, 『日本人と浄土』講談社学術文庫
- 柳田国男, 『海上の道』『柳田國男全集1』筑摩書房所収
- 柳田国男, 1956, 『海南小記』『柳田國男全集1』筑摩書房所収

学習院大学 法学会雑誌 55巻2号 (2020.3)

柳田国男, 1909, 『石神問答』『柳田國男全集15』筑摩書房所収

(財)大日本蚕糸会蚕業技術研究所・編, 2010, 『養蚕』(財)大日本蚕糸会
蚕業技術研究所